

「実はねえ、事務はもう埋まっちゃってるんだよね」

小さなビルの小さなイベント制作会社。の面接を受けている夢子。

目の前の社長に軽い口調でそう言われて夢子は目を丸くした。

「え、」

「ああ、でも新しい課を作ろうと思っててさ。そこだったら空いてるよ」

「……どんな課なんですか？」

「というかねまず教えておかないといけないんだけど、うちイベント制作会社っていうのは表向きで本当はアイドル事務所なんだよね」

「えっ！？」

今度は夢子の大きな声が質素な部屋に響いた。

「とりあえず明日から来てよ。嫌ならすぐ辞めてもいいからさ」

そう言われて夢子はその会社を後にした。

ビルから出て駅に向かって歩き出して、すぐに立ち止まる。

アイドル会社？

…詳しく聞いてみたら地元メインで活動する男性アイドル専門の事務所とのことだった。

所属しているアイドルの写真も軽く見せてもらったが、眩しいばかりの顔と体の整った男性…というよりむしろ男の子みたいな子たちが十数人ほど所属しているようだ。

ファンもそれなりにいて、ファンが面接に応募してくるのが面倒で表向きはイベント制作会社として求人を出していると。

就職はしたい。

でもアイドル事務所というのが夢子の想定になくて混乱している。

そういえば新しい課がどんなものなのかは結局答えを貰いそびれてしまった。

「でも嫌ならすぐ辞めてもいいって言ってたしな…」

とりあえず明日行ってみて、社長の言う通り嫌ならすぐやめよう、と思っていた。

翌日、夢子は更に混乱した。

「君は1日ここにいてくれればいいよ」

「なんですかこの部屋！」

出勤して案内された部屋は、事務所から出てビルの廊下を通り一番奥に配置された部屋だった。

一つ目のドアを開けると玄関スペースがあり、もう一つドアを開けると中には広いベッド。おしゃれな装飾。壁に開いたままになっているドアがあって、その奥はパウダールームとシャワーブースだろうか、半透明のガラスが見えてその向かいにはトイレまである。

これではラブホテルだ。

「じゃああととはよろしくね、もうすぐみんな来るから。
嫌ならちゃんと拒否するんだよ～」

「よろしくって何ですか！？私ここで何すればいいんですか！？」

社長はニコニコと笑って出て行く。

夢子は呆然と立ち尽くした。

何すればいい、ってこんな部屋ですることなんて決まりきってる。

(誰と？……え、まさかアイドルと？)

そんなことできるわけない。

立ち尽くしていた足をなんとか動かして夢子は出ていこうとドアのレバーを握った——、ときだった。

ガチャッ

夢子がドアを引く前にドアがこちらへ迫ってきて夢子は慌てて足を引いた。

現れたのは明るいブラウンのふわふわ髪の子……、
いや、成人はしていそう。

その彼は夢子を見て、ぱあっと笑顔になった。

「夢子ちゃん？だよね？」

「は、はい、」

さすがアイドル。

写真で見るよりももっと眩しい。発光している。

夢子は昨日帰ってから改めてネットで調べた写真たち
を思い出した。

彼は確か「真斗(まさと)」と言う名前だった。

「真斗さん、ですよネ」

「え、覚えてくれたの？うれし〜♡♡オレ夢子ちゃんに
会いたくて早めにきちゃった♡社長もやるなあ♡まさか
本当に性欲処理課を作ってくれるなんて♡♡」

(——なんて？)

ドアを閉めた真斗はそのまま夢子に抱きついてきた。

細いのにかくましい体が夢子の体を包み、顔ごと抱き
込まれる。顔が薄い胸にゴツゴツ当たって痛い。

「あの、今なんて」

「夢子ちゃんに会いたくて早めに来ちゃったんだよ♡」

「そこじゃなくて」

そのままふわりと体が浮いた。抱き上げられてしまった。

真斗はそのままベッドへ一直線に向かっていく。

「オレ今日はボーカルレッスンあるんだけど、その時間までしょ♡♡」

柔らかいベッドに沈められその夢子の体に真斗が覆い被さる。

甘えるように抱きしめられ頬擦りされた。

（さっき真斗さん性欲処理課って言ったよね。本当に？これ夢？）

どうすればいいのか分からない夢子を差し置いて、真斗の手は夢子の体をまさぐっていく。

胸の輪郭を確かめるようにふわりと包んだかと思えばその手は下がっていき、夢子が履いていたパンツの上から腰、お尻、太ももとなぞっていった。

「夢子ちゃん…♡」

そうしながら真斗はうっとりとした顔で夢子の顔に顔を近付けた。

彼が何をしようとしているのか分かってしまった。

ちゅ、

唇が一瞬唇に触って、押し付けられて、それが何度か繰り返され。

ちゅむ♡

重ねるように角度を変えられると唇はぴったりと密着した。

真斗が既に興奮しているのが伝わってくる。

だって、当たっているから。硬いものが。

(……そうか、若い男性アイドルの性欲を処理してスキャンダルを防止しろってことか)

理解はしたけれどすぐには飲み込めない。

その間も真斗は唇の角度を何度も変え夢子の唇を開こ

うとしている。

（仕事…、これは仕事……、……にしては、気持ちいい）

開かされた唇の隙間に真斗と舌が侵入してきた。

その舌は夢子の下唇をゆっくりと舐め上げ侵入し、夢子の舌を探す。

すぐに舌と舌が触れて、絡まるようにゆっくりと奥まで入ってきた。

（これ、やばいかも）

薄く目を開けると発光するほど綺麗な顔が目を閉じて夢子の舌の感触を楽しんでいる。

（こんな子と触れ合うなんてきっと普通に生活したら有り得ないんだから…、もう覚悟を決めて頑張るしかない！手コキでもフェラでもなんでもしてやる…！）

そう決心して少しだけ舌を差し出してみたら吸い上げられた。

「……ふ、あ」

「キス気持ちいいね♡」

真斗は吸い上げた夢子の舌に吸い付いて、離して、吸い付いて、離して、夢子の唇がぽかんと開いたままなのをいいことにときどき唇にも吸い付く。

きっと自分が彼を気持ちよくしなければならないのに翻弄されっぱなしだ。

「う、…ん、っ」

「体温上がってきたねー…♡夢子ちゃんの抱き心地最高♡♡」

意識も持っていかれそうだった。

しかしキスしながら体を弄っていた手が夢子の胸元に集中し始める。

気付けば服を捲られ、もう片手はパンツを下着ごとずり下げようとしていた。

——と、そのとき。

ドアが開く大きな音が聞こえて、もう一つ聞こえて、派手な髪色の男の子が入ってきた。

「あ～～！早速やってんじゃない！俺も俺も！！」

(え……！？)

真斗も夢子も同時に彼に視線を奪われる。

彼の名前は確か「元次(もとつぐ)」だ。

真斗と同じ歳で確かグループも一緒だったはず。

「元次くんおはよー。今日オレボーカルレッスンなんだけどせっかくだからその前に味わっておこうかと思って…」

「俺はこの後ダンス！だけど社長に聞いて来ちゃった！俺も混ぜて」

ベッドに乗り上げる元次。

夢子はキスしていたことも忘れて二人を交互に見た。

(二人同時に相手するってこと？そんなのアリなんだ？…そうか、忙しい彼らを一人ずつ相手してたら時間がもったいないとか、)

ぐるぐると考えを巡らせる夢子をよそに、元次は夢子の上半身を起こすとその体を胸で受け止め背後から夢子を抱きしめた。

そしてその手はさっきまで真斗が捲りかけていた夢子のブラウスを一気に捲ってしまう。

「おっばいだ～～♡♡♡」

「おっばい…♡」

元次はそのままブラジャーのホックまで外してしまった。

下着ははらりとベッドの外へ落とされる。

（は、恥ずかし……、やっぱり私も裸にはなるのかぁ。
これどこまで触られるんだろう）

「もうだめだ、おっばいしゃぶりたい♡♡」

後ろから元次の手のひらに掬われた胸、そこへ正面にいた真斗が顔を近付けた。

（あ、うそ）

夢子がその真斗に視線を向けるのと同時に、

れるっ♡♡♡

真斗の伸ばした舌は乳首を弾いた♡

「んっ、うゝ♡♡」

びく、と一瞬体が揺れる♡♡

すぐ耳元で元次の小さな笑い声がして、それから囁かれた♡

「乳首気持ちいいの？真斗ちゃんとキスしてたでしょ、もうすっかりその気になっちゃってるんだね♡」

くすぐったいその声に身を振ると、また、
れるっ♡

「あッ♡」

真斗に下から上へ乳首を弾かれ♡♡

れるっ♡れるっ♡♡

「ふ、あっ♡♡」

今度は上から下へ、また下から上へ♡♡

れるっ♡♡れるっ♡♡れるっ♡♡れるっ♡♡れるっ♡♡
♡れるっ♡♡れるっ♡♡

「あッ、あ、あ、っ、あ♡♡んゝ、あぁっ♡♡♡」

ほんの少しの刺激で勃ち上がった乳首を高速で弾かれた♡♡

「声かわいい、そんな声出されたらもっと興奮しちゃうよ♡♡♡」

真斗が乳首に唇を寄せたままそう言って、もう片方の

乳首に指を立てる♡

その指は♡♡

すりっ♡♡すり、すり、すり、すり、すり、すり♡♡

指の腹を摩擦するように乳首の先端を撫で♡♡

「ああッ♡♡んッあ♡♡あ♡♡は♡♡あ♡♡♡」

細かな摩擦であっという間に快感を生んだ♡

れるっ♡♡れるれるれる、れるっ♡♡れるっ♡♡れる
っ♡♡れるっ♡♡

すりすりすり…♡♡すり♡♡すりすりすりすりすりっ
♡♡♡

背中に感じる元次の暖かさ、大きな手のひらで掬われた
胸、その先端を舌で弾かれ、指で擦られる♡♡

夢子は二人に挟まれ、じっとしていられなくて反射的
に上半身を振った♡♡

…それから、熱くなっている下半身にもじも
じと足を動かす♡♡

「こっちも触ってほしい？♡♡♡」

「じゃあ乳首は俺がしてあげるね～♡♡」

乳首がじんじんとして頭がぼーっとしている♡♡

夢子はろくに抵抗の言葉も吐かずされるがままにパン

ツと下着を抜き取られた♡♡♡

そのまま真斗に足を開かされる♡♡あまりに恥ずかしくて閉じようとしてもびくともしない♡

真斗の指はすぐに確かめるようにそこをなぞり始め、その間も乳首は元次の指に揉まれている♡

「あ〜♡♡夢子ちゃんのおまんこ濡れてるじゃん♡」

「ん、…は、あ♡あ♡♡♡あっ♡」

「乳首気持ちいいもんね♡真斗におまんこしてもらおう♡♡」

（私が気持ちよくするんじゃないの…？なんで私がされてるの、）

そんな思考はすぐに途絶えた♡♡♡

割れ目のぬめりを掬った真斗の指先が皮の上からクリトリスを撫でたから♡♡

「ア、……ッ♡♡♡」

その一瞬で火がつくように熱くなる♡♡

指は愛液を塗りつけるように撫で回し、すぐ離れていたのに♡♡

ドク♡♡ドク♡♡と脈打つ♡♡痛いほど♡♡

「足もビクビクしてる♡♡」

「乳首とクリ、一緒にしてみよっか♡♡♡」

「あ、まっ、」

すりすりっ♡♡♡すりすりすりすりすり……♡♡♡♡

元次の指は両乳首の上下を軽く挟んだまま左右に擦り

♡♡♡

ちゅく♡♡♡ちゅく♡♡ちゅく、ちゅく、ちゅく♡♡

ちゅくちゅくちゅく…♡♡♡♡

真斗の指は薄い皮の上から神経の塊を撫で回す♡♡♡

すりすりすりすり、すりすりすりすりすり♡♡♡♡

ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくっ♡♡ちゅく♡♡ち

ゅく♡♡ちゅく♡♡ちゅく♡♡

「うあッ♡♡♡あ、はッ♡♡あ、あっ、ん♡♡あ♡♡だ
めっ♡♡♡ア、っ♡♡♡」

元次の腕の中で体がビクつく♡♡

彼の胸に背中を押し付けたり逆に反ったりしながら、
快感を逃がそうとしても駄目だった♡♡♡

二人は夢子の顔を伺いながら執拗にそこを狙って責め
続けている♡♡♡

「アッ、あ、ん”っ♡♡♡や♡♡♡アッ♡♡あ”、ッ♡♡う♡♡♡」

すりすりすりすりすりすりっ♡♡♡すりすりすりすり♡♡
すりすりすりすりすりすりすり……♡♡♡♡

ちゅく♡♡ちゅくちゅくちゅくっ♡♡♡ちゅくちゅく
ちゅくちゅくちゅくっ♡♡♡

(足、開いちゃう……♡♡♡♡勃起乳首擦られて♡♡クリ撫でられて♡♡)

与えられる快感に意識が集中する♡♡

俯いた夢子の視界には夢子の性感帯の粒を刺激し続ける三つの手♡♡

すりすりすりすり♡♡♡すりすりっ♡♡すりすりすり
すりっ♡♡♡

ちゅくちゅくちゅくちゅくっ♡♡ちゅくちゅくっ♡♡
♡ちゅくっ♡♡♡ちゅくっ♡♡♡

「あ”♡♡♡あ、アッ、あ”♡♡♡…は、う”♡♡んッ”♡♡♡だ、だめえ……ッ♡♡♡」

下半身に力が入っていく♡♡

絶頂の予感に体温が一気に上がるのを感じた♡♡

それを二人も感づいたのだろう、元次は夢子の耳に舌を差し込み、そのくすぐったさに夢子が顔を上げると真斗はまた唇に吸い付いた♡♡♡

「ん`ッ、う`うう…！♡♡♡♡♡あ、あ`ッ♡♡んむ`っ♡♡♡う`♡♡ん`……！♡♡♡♡♡」

「…イきそうだね♡♡」

「夢子ちゃんのイくところを見せて～…♡♡♡ほら♡イこ♡♡イこ♡♡」

すりすりすりすりすりすりすりすり……♡♡♡♡♡
ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく……♡♡♡♡♡

追い詰めるように規則的になる動き♡♡

夢子は背を丸めて下腹部を力ませた♡♡♡

開いてしまった足はピンと突っ張り、指をぎゅっと握り込む♡♡

（イく、このままじゃイっちゃう♡♡二人に乳首とクリされてイクっ♡♡♡イクイクイクイク……！♡♡♡♡♡♡）

すりすりすりすりすりすりすりすりすり……♡♡♡♡♡
ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく
……♡♡♡♡♡

すりすりすりすりすりすりすりすりすり……♡♡♡♡♡
ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく
……♡♡♡♡♡

「…………ツ、♡♡♡♡♡♡うあ、あゝ、……いくツ、
…………~~~~~ツツツツ！！♡♡♡♡♡♡」

ビクンッ♡♡♡

ビクッ！♡♡♡ビクッ！♡♡♡

「う、あ…………、」

お腹にぎゅうっ♡と力が入って、夢子の体が跳ねた♡
♡

「イっちゃった♡♡♡♡夢子ちゃんの気持ちよくていっ
ぱいいっぱいになってるイキ顔かわいっ♡♡♡」

「ほら夢子ちゃん、もうちょっと体倒そうね♡♡♡」

絶頂直後のふわふわした感覚が抜けないうちに、元次の胸から体がずり下がった♡♡

「オレ最初でいいの？」

「いいよ、順番順番！」

軽い調子の言葉が飛び、真斗が服を脱ぎながら夢子の足の中に入ってきたところで夢子は目を見開いた♡

（え、……入れるの？）

興奮気味に衣服を次々とベッドの下に落としていく♡

現れたのはしっかりと勃起した真斗のちんぽだった♡

♡♡

（あれ？手コキとかフェラとか、そういうのじゃないの？セックスするの？）

心の戸惑いとは裏腹に体はだらりと力をなくしたままだ♡♡

真斗が夢子の膝に手を置き更に足を広げてもされるがまま♡♡♡

しかも上から元次があやすように乳首もふに♡♡ふに♡♡と揉むから体から熱い感覚は抜けてくれない♡♡

「入っちゃうよ♡♡♡オレのちんぽ♡♡夢子ちゃんのおまんこに…♡♡♡」

先端をめり込ませるように割れ目に当てられた♡♡♡はしっかりとそこにちんぽの感触がする♡♡

「あ〜〜〜♡♡♡♡入ってく……♡♡夢子ちゃんのおまんこあったかーい♡♡♡♡♡」

手で支えなくてもしっかりと埋まっていく硬くて長いちんぽ♡♡♡

夢子は思わず真斗の腕を掴んだ♡♡

体の中にちんぽの感触♡♡下半身がじんわり熱くなって、背中はずくずくと震えて♡♡♡♡

（セ、セックスしちゃってる、アイドルと…！アイドルのちんぽ受け入れちゃってる…）

「やば♡♡♡おまんこ気持ちいい♡♡ごめん、我慢できないかも♡♡♡」

真斗が夢子を抱きしめるように倒れこんできた♡♡
両腕を夢子の上半身に巻きつけ、そしてすぐに腰を振
り始める♡♡♡

とちゅっ♡♡♡
とちゅっ、ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅっ♡♡♡
一気に奥まで押し込み、細かいピストン♡♡
真斗は夢子の首筋に顔を埋め匂いを嗅ぐように思っ
きり息を吸い込むとその薄い皮膚に吸い付いた♡♡♡

「あゝ♡♡♡」

その刺激で夢子の体がしなる♡♡
そうして腰が浮いたことで真斗のちんぽは更に奥まで
突き込まれた♡♡♡

とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅ
っ♡♡♡とちゅっ♡♡♡
「あゝ、あっ、ンゝ♡♡♡ん♡♡♡アゝっ♡♡あ、は
っ♡♡♡」
「夢子ちゃんの匂いやばい♡♡すっごく興奮する♡♡♡
♡」

とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅ
っ♡♡♡とちゅっ♡♡♡

「ん`っあ`♡♡あ、あッ`♡♡♡あ♡♡♡ア`♡♡♡
あ`♡♡♡っ♡♡♡」

「ねえ♡♡ここも♡♡ここもしてあげるね♡♡♡」

ちんぽを夢子の粘膜で摩擦し興奮しきった真斗は体を
捻ると二人の間で赤く腫れたままのクリトリスを指で押
し潰した♡♡♡

ぐりゅっ♡♡♡♡♡

「……ッッッ！！♡♡♡♡♡」

「ああ、おまんこ締まったあ♡♡これいいんだ、気持ち
いいんだね♡♡♡♡これしててあげるから♡♡夢子ちゃ
んも一緒に気持ちよくなる♡♡♡♡」

とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡
とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡

ぐりゅ……っ♡♡♡ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡♡♡ぐ
りゅりゅ♡♡♡ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡♡♡

「うアあッッ！♡♡♡♡♡あ、ッ、や♡♡だめっ♡♡♡
くり、だめ……っ♡♡♡ン` ああッ`！♡♡♡」

ピストンが強くなって、その勢いでクリトリスを捏ね
られる♡♡

真斗の片手はまだ夢子の体に巻き付いたままだ♡♡

拘束するようにきつく抱かれたままちんぽを打ちつけ
られクリトリスを捏ねられ♡♡

絶頂直後ですぐに快感に飲まれ喘ぐ夢子に煽られるよ
うに、真斗の呼吸も荒くなっていった♡♡

とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡
とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡とちゅッ！♡♡♡

ぐりゅりゅ♡♡♡ぐりゅぐりゅぐりゅっ♡♡♡ぐり
ゅっ！♡♡♡ぐりゅっ！♡♡♡ぐりゅっ！

「あッ、アああッ！♡♡♡んっ、あッ♡♡♡ふ、ア、
……ッ♡♡ん…ッう！♡♡♡」

「あ〜…♡♡気持ちいい♡♡♡夢子ちゃんのおまんこ気
持ちいいよお♡♡腰止まんない…♡♡♡♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ
とちゅ……ッッ！！♡♡♡♡♡

言葉の通り、真斗は懸命に腰を打ちつけてくる♡♡

ペースが上がり奥を細かに突くピストン♡♡♡

それに耐えられないというように喉を反らせた夢子に、
頭上から元次が顔を近付けた♡♡

「俺ともキスしよ〜？♡♡キスしながら……、」

元次の指が、真斗と夢子の体の隙間で勃起したままの
乳首の根元を挟む♡♡

ぎゅっ♡♡

「ふっあッ アアアッ♡♡♡♡」

それだけでもビクついてしまうのに♡♡♡

元次は夢子の唇を自らの唇で塞ぐと、

こりっ♡♡

こりっこりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡

その指で乳首を捏ね回した♡♡遠慮のない動きに敏感

になった薄い皮膚が伸ばされ、刺激されて♡♡♡

「ン うううッ ツッ！！♡♡♡♡♡んぶっ、うッ♡
♡んッ、ンッッ！！♡♡♡♡」

体が暴れてしまう♡♡♡

気持ちいい感覚でいっぱいいっぱい体が言うことを
聞かない♡♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ
とちゅッッ！！♡♡♡♡♡

細かな必死ピストンでおまんこの奥を突かれ♡♡

こりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡こりこりこり
こりこりこりこりこりっ♡♡♡♡♡

根元から揺らすように硬くなった乳首を捏ねくり回さ
れ♡♡

ぢゅっ♡♡ぢゅぷ♡♡ぢゅううッ♡♡♡ぢゅっ、ぢゅ
る、ぢゅぽっ♡♡♡♡

唇も舌も責めるように強く吸われる♡♡

(き、きもちいい……！♡♡これ気持ち良すぎる♡♡私
が二人を気持ちよくしなきゃいけないはずなのに♡♡♡
♡イったばかりのおまんこ突かれてクリ押し潰されて♡
♡乳首も捏ねられて舌も唇もぢゅぽぢゅぽ♡吸われて
……♡♡♡♡♡体また力んじゃう、イク準備しちゃって
る…！♡♡♡♡♡)

真斗のピストンを受け入れるように限界まで開いていく♡♡

筋が浮くほど開ききったところでカクカクとみっともなく震え出し夢子の手はシーツを握りしめる♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅツツ！！♡♡♡♡♡

こりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡こりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡♡

ぢゅぽっ♡♡♡ぢゅる♡♡ちゅ、ちゅっ♡♡♡ぢゅうう〜〜〜……♡♡♡♡♡

「ん” っう♡♡♡♡ツ” う” ♡♡♡♡♡んむっ” ♡♡♡ウ” ♡♡ン” あ” …ツ！♡♡♡♡あ、あ、あ” ツ、あ♡♡♡♡」

「…………オレ、もうイっちゃう♡♡♡夢子ちゃんのおまんこでイク♡♡イク……♡♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅツツ！！♡♡♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅツツ！！♡♡♡♡♡

夢子を強く抱きしめラストスパートの小刻みピストン

♡♡♡♡♡

耳元でをくすぐる真斗の荒い呼吸に小さく喘ぐ声が混じり、それすら夢子の快感を高めた♡♡♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ
とちゅツツ！！♡♡♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ
とちゅツツ！！♡♡♡♡♡

「…………ツ”、う”♡♡♡♡い、く♡♡♡イ、っちゃん
ます…………ツ！♡♡♡♡」

「うん、一緒にイこ…！♡♡♡♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ
とちゅツツ！！♡♡♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ
とちゅツツ！！♡♡♡♡♡

「う”♡♡ア” ツツ♡♡♡♡…………、…………いくツ、あ”
ツああああ” あ” あ” ツ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

どぶ…………♡♡♡♡♡♡

びゅくっ、びゅるる、びゅるっ♡♡♡♡♡

真斗に痛いほど抱き締められ、何度かおまんこの中で
真斗のちんぽがビクつく♡♡♡

それが落ち着きずるりと抜けると、すぐに元次が真斗
と場所を変わった♡♡

「えっちい夢子ちゃん見てたら我慢できね～♡♡♡♡♡
すぐ入れちゃうからね♡♡」

おまんこの痙攣もおさまらない、呼吸も整わないのに
♡♡

ぱんッ♡♡♡♡♡

「…お” ツツ♡♡♡♡♡」

元次は夢子の足を浮かせるように自らの腰を差し込む
とすぐに突き入れてきた♡♡♡

萎えようとしていたそこを無理やり開かれて呻くよう

な声を上げてしまう♡♡

「あは♡♡♡♡」

体をしならせ、見開いたままの目を白黒させる夢子を、
元次は舌舐めずりして見下ろし、

ぱんっ♡♡♡

ぱんっ♡♡♡

ぱんっ♡♡♡

腰を振る♡♡♡♡♡

「お、ッ、ん” あ”♡♡」

「おまんこ吸い付いてくれてる♡♡夢子ちゃんのおまん
こはえっちなこと大好きなおまんこなんだねえ♡♡♡」

ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡

腰を掴まれ突き込む強さが増した♡♡

「ん”、ッお♡♡お”♡♡ま、って、くださ、……ッ♡
♡♡っ、ほ、オ♡♡♡♡♡」

「待たない♡♡♡♡夢子ちゃんのおまんこで俺のことも
気持ちよくしてよ♡♡♡」

ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡
ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡ぱんッ♡♡♡

肌と肌がぶつかる音が激しくなる♡♡

髪が揺れるほど体ごと揺らされていると、今度は上半身を真斗に抱き上げられた♡

さっきまで元次にされていたみたいに背後から抱きしめられ、今度は真斗のその手は夢子のクリトリスに伸びてくる♡♡♡

「ここ♡好きなんだよね？♡♡♡ちんぽパコパコされながらこのちっちゃくて敏感なクリちゃんしごかれるのたままないんでしょ♡♡♡」

「……、っ」

予感に顔が引き攣る♡♡♡

腰を掴まれ後ろからも抱きつかれ、逃げ場はない♡♡

真斗は爪を立てるように、クリトリスの下から上へ引っ掻くように弾いた♡♡♡

カリッ！♡♡♡♡

「お” ……………ッ”！！♡♡♡♡♡」

ビクビクビクッ！！♡♡♡♡♡

突かれながらも大袈裟に体がビクついてしまう♡♡♡

何度もいったせいなのかさっきよりも快感が強い♡♡

♡♡

ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡
ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡

カリカリカリッ♡♡♡♡♡カリカリカリカリッ♡
♡♡♡♡

「ほ、お” ツ♡♡♡♡♡お” ……ツ” オ、おツ” ♡♡
♡」

ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡
ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡ぱんっ♡♡♡

カリカリカリッ♡♡♡♡♡カリカリカリカリッ♡
♡♡♡♡

「オ” ツ、んお” …ツ！♡♡♡……～～ツ、ほおお” ツ
ツ！！♡♡♡♡♡」

(きもちいいの、つよい……♡♡♡♡♡いったばっかな
のに無理やり気持ちよくされる♡♡♡♡♡)

パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ
！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡パンッ！♡♡♡
「ん” オ”、…ツ、ほ、お” ♡♡♡♡♡お♡♡♡♡♡お
” ♡♡♡♡♡」

腰ごとぶつけるようなピストンに♡♡♡♡♡
カリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡♡♡
「お” ツ” おおお” ツ♡♡♡オ” ツ” ♡♡♡お” ツ”
♡♡♡ツツ、ほ、オ♡♡♡♡♡」

硬い爪が高速でクリトリスを弾く♡♡♡♡

(だめ…………♡♡♡♡♡きもちよすぎる♡♡♡♡♡こんなの、あたま、やける…………♡♡♡♡♡)

「あれえ？夢子ちゃん腰上がってきたね♡♡♡♡ここきもち一の？♡♡♡♡ここめいっぱい突いてあげよっか♡♡」

「腰クイクイしちゃって…えっちだなあ♡♡♡♡♡オレもいっぱいクリカリカリしてあげるね♡♡♡♡♡あ♡♡乳首もしててあげるよ♡♡♡♡♡」

「……ッ、そん、な♡♡♡また、ぜんぶ一緒、に♡♡……ツツツおおおお” お” お” ツ！！♡♡♡♡♡」

パンツツ！！♡♡♡パンツツ！！♡♡♡パンツツ！！♡♡♡パンツツ！！♡♡♡パンツツ！！♡♡♡パンツツ！！♡♡♡

快感のあまり浮いてしまった夢子の腰を、まっすぐにえぐるちんぽ♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡♡♡擦られ敏感に勃起したクリトリスを尚もしつこく引っ掻かれ♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりッ♡♡♡♡♡♡

乳首も握り込まれめちゃくちゃに捏ねられる♡♡♡♡

「お”っ、お♡♡オ”ツツ、お、ん”ん”ツツ！♡♡♡♡
♡♡す、すご……、い”、これ！♡♡♡おちんぼ、らめ
え”っ！♡♡♡♡♡」

「いい、だろ～？♡♡♡いいって言ってごらん、元次く
んのちんぼいいって♡♡♡♡♡」

「……、う”♡♡♡♡♡いい、いい、です♡♡♡もと、つ
ぐくん、の♡♡♡ちんぼ…！♡♡♡いい、……いい、れ
す…！♡♡♡♡♡」

「かわいい～♡♡♡♡♡俺も頑張っちゃう…♡♡♡♡
♡」

「あ、ちょっとお…、オレは？♡♡♡夢子ちゃん、オレ
の指も気持ちいいよね？クリと乳首も気持ちいいでしょ
？♡♡♡♡♡♡」

「きもち♡♡きもち、い、れす♡♡♡♡♡ちくびも♡♡
クリも…♡♡♡♡♡カリカリぐりぐりされるのいい…ツ♡
♡♡♡♡」

「夢子ちゃんのこのちっちゃいのにすっごく敏感なお豆
さんたち、一生懸命勃って気持ちよくなってて可愛いよ
♡♡♡このままイこうね♡♡♡♡♡」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッ！
！！♡♡♡♡♡

「んおお” お” お” 、……！！♡♡♡♡♡ッッ、ほお” 、
お” 、っ！！♡♡♡♡♡ちんぽ♡♡♡つよ、……お” ♡
♡♡♡♡♡ッッ、お” お” お” ♡♡♡」

元次が思いっきり腰を打ちつけ始めた♡♡♡♡

ちんぽに押し上げられる体は真斗が受け止めながら、
カリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡♡♡
「お” 、あ” 、……ッ” ア” ♡♡♡あぁあ” あ” あ” ツ
ッ！♡♡♡♡♡ら、らめッ、また……！♡♡♡♡♡」

乱暴にクリトリスを引っ掻き♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりッッ♡♡♡
♡

「ひ、お” ……ッ” おお” オ” っ、お” っ！♡♡♡お”
ッ、ん” っ！♡♡イくっ、これまたイっちゃ、……ツん
” お” 、お” お” お” お” ツッ！！♡♡♡♡♡」

勃ち上がった乳首も何度も捻る♡♡

「い” 、っちゃう、イっちゃううう……！！♡♡♡♡
♡♡お” っ、ん♡♡♡おッ” 、お” ツ、オ” っお” ！！
♡♡♡♡♡」

カクカク、夢子の体がまた、絶頂の予感に震え始める
♡♡♡♡

快感は下半身から迫り上がってきてクリトリスと乳首
で増幅し、脳みそを焼き尽くしていく♡♡♡♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！

！！♡♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッッ！♡♡♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりッッッ♡♡♡

♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッッッ！

！！♡♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリッッ！♡♡♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりッッッ♡♡♡

♡

二人に挟まれめちゃくちゃにされ♡♡♡♡♡

——夢子は気付かなかった、また新しく部屋に誰かが入ってきたことに♡♡

「イ、く、う、うう……！！♡♡♡♡♡お……ッッ
ッ、ほ、……………ッッッッ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

■続きは製品版にて♡